施設看護師1

# 稲葉瑛梨奈さん Erina Inaba　松本麻衣さん Mai Matsumoto

●社会福祉法人ユーアイ二十一　特別養護老人ホーム　太陽の家横濱羽沢

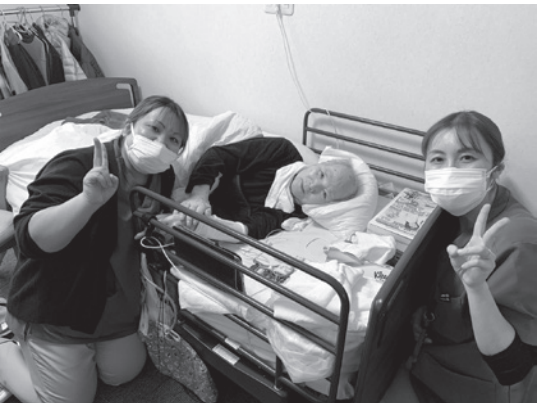
# 常にスキルアップに努め入居者に「還元していきたい」

**出産、子育てを機に病院を退職し、特別養護老人ホーム「太陽の家横濱羽沢」で再び看護師として働くことにした稲葉瑛梨奈さんと松本麻衣さん。医療対応を強化している同施設では、彼女たちの活躍により利用者の誤嚥性肺炎や褥瘡が劇的に減少。末期がんの利用者への対応などにも積極的に取り組んでいる。**

## 利用者の日常にかかわりイベントやレクにも参加

3人目の出産を機に働いていた市民病院を退職し、2年半ほど子育てに専念した後、太陽の家横濱羽沢に入職した稲葉瑛梨奈さん。夜勤がなく、託児所付きだったことから、非常勤の看護師として働くことを選んだ。松本麻衣さんは、長男が小学校に上がるタイミングで多忙だった急性期の病院を辞め、子どもに寄り添うことに。学校に慣れてきたので仕事を探そうと思っていたときに同施設に勤める知り合いの介護士に勧められ、入職することになった。

介護施設と病院とのいちばんの違いは、医師がいないこと。「病院では、急変があればすぐに医師に報告して最善の治療が施されますが、施設では看護師が判断しなければなりません。嘱託医に連絡するかを判断するのも看護師。最初は戸惑いましたが、少しでも迷ったら他の看護師に相談しています」と稲葉さん。医師に伝える際は介護職からの情報なども含めて自分たちでアセスメントし、端的に伝えることを心がけている。そのうえで、高齢者は入院するとADLが落ち認知機能も下がりやすいので、なるべく施設で過ごせるように健康維持、改善に努めている。



がん末期の入居者に対し、夕方の退勤前に体調を確認。バイタル測定のほか、皮膚の確認なども行った

一方で、介護施設は高齢者の生活の場なので、業務優先になりがちな病院と違い、利用者一人ひとりとゆったりかかわれるのが魅力だ。

「病院では常に時間に追われていましたが、施設では自分で時間を調節しながら動けるので、できるだけ時間を見つけて利用者とコミュニケーションをとるようにしています」と松本さん。看護師は具合が悪い人とかかわることが多くなるので、施設のイベントやレクなどにも参加し、元気な人とも積極的にかかわる。利用者のいきいきとした表情を見るの

(C) 2024 日本医療企画

稲葉瑛梨奈さん

短期大学卒業後、病院の神経内科、耳鼻科、眼科、婦人科、小児科に勤務。3年間のブランク後、2021年、太陽の家横濱羽沢に入職。当初は施設内の企業主導型保育室に子どもを預けながら勤務

松本麻衣さん

看護専門学校卒業後、病院の消化器外科、形成外科、皮膚科、婦人科、消化器内科に勤務。半年のブランク後、2022年より太陽の家横濱羽沢に勤務

**社会福祉法人ユーアイニ十一 太陽の家横濱羽沢**

●神奈川県横浜市神奈川区羽沢町2-1

URL www.ui21.or.jp/yokohama_hazawa/

2018年開設。特養110床、ショートステイ10床。廊下や居室の一部の床に畳を採用するなど、和風の雰囲気のなか、入居者一人ひとりの生活スタイルに合わせたケアの提供に努めている。看護職員は常勤4人、非常勤7人（2024年3月現在）

は、看護師にとってもリフレッシュになるという。

## 多職種連携を意識しつつ あらゆる情報をキャッチ

同施設では、コロナ禍で看護師が大幅に減ってしまったことから採用に力を入れ、稲葉さんや松本さんが入職。彼女たちが利用者の健康管理などに積極的に取り組んだことで、今年度は誤嚥性肺炎の件数が激減したという。万一かかったとしても、早期発見、早期治療により、2週間程度の短期間の入院で退院してくるケースがほとんどだ。

「看護師だけでなく、多職種が連携して見守っていくことを意識しており、食事の形態についても栄養士と歯科衛生士、介護スタッフと一緒に食事の様子を確認し、話し合って決めます。ちょっとでもむせたら介護職がすぐに伝えてくれて、どうすればいいか検討するので、予防につながっていると思います」と稲葉さん。褥瘡についても全スタッフで情報共有し、マットレスを調整するなど、その人に合わせて対応することで、褥瘡のあった人も施設に来て治るケースがほとんどだという。

「日常生活をずっと見ている介護職の『今日は何かちょっと違う』という些細な気づきによって発見できることがたくさんあるので、私たち看護師はあらゆる情報を見逃さないように努めています」と松本さんは話す。介護職とのコミュニケーションは特に密にしており、手が空いたらユニットに顔を出し、些細なことでも伝えるし、情報を得るように心がけているという。何でも話せる雰囲気をつくっていくことで、お互いの働きやすさにもつながっている。

## 施設全体で情報共有し 介護職の負担を軽減

同施設は看護体制加算Ⅱを算定しており、看護体制を手厚くして医療対応が必要な利用者を積極的に受け入れている。近々ポータブルエコーを導入するなど、設備的な環境も整いつつある。

「試験的にポータブルエコーを導入した際、腸閉塞がわかり、すぐに受診し入院につながって事なきを得ました」と松本さんは説明する。

特養では注射や点滴はできないと思っている人も多いが、機器を使いこなしたり、医療行為を行える看護師がいることは、同施設の強みとなっている。

看取りについても、センサーマットを使った見守り介護ロボット「ａａｍｓ」を全床に採用。心拍や脈拍のデータに基づいて行動できるので、家族を呼ぶタイミングもわかり、ご家族に見守られて息を引き取るケースがほとんどだという。末期がんの利用者も受け入れており、麻薬を用いつつ、施設で過ごしたいという本人の希望に応じて訪問看護とも連携しながら対応している。

「看取りもそうですが、常に施設全体で情報共有することで、担当の介護職だけが背負い込むことがないように心がけています」と稲葉さん。

さらに2人は、常に医師から指示を受けるのではなく、もっと自分たちで判断して動けるようになりたいと口を揃える。「病院で働いているときのような最先端の医療に接する機会は減りますが、常にアンテナを張って研修に出るなどして遅れを取らないように努め、入居者に還元できる資格を取りたいです」。

同施設は医療対応に力を入れることで、看護師がいきいきと働き成長していける場になっている。



(C) 2024 日本医療企画